

## 84 聖マタイの召命

### 《聖マタイと天使》・《聖マタイの殉教》の比較

何故これらの聖マタイは眼鏡を掛けていないのか

2024

真鍋友範



《聖マタイと天使》



《聖マタイの殉教》

\* どちらのマタイも眼鏡を持ってさえいない。

#### 1 目が良くなったからではない

2013年以来、小生は《聖マタイの召命》における真にイエスに呼び出された人物は、眼鏡の収税吏であると。繰り返し述べさせていただいた。

呼び出されたのは、眼鏡の収税人ではない、とお考えの方は、《聖マタイと天使》や《聖マタイの殉教》でもマタイは眼鏡を掛けていない。従って、マタイは眼鏡の人物では決してない、と即断されるのだろう。

まず、当時の眼鏡の構造を知っておく必要がある。

眼鏡は13世紀後半にイタリアで発明という。\*（ウィキペディア・2024）  
その初期の構造では、眼鏡には鶴首は備えられてなく、必要時だけ手に持って使っていたという。つまり、当時は、【常時身につけたままの状態の使用法ではなかった】ということだ。

しかも、希少で価値があり、身分の高い人物や、裕福な商人しか身につけることが出来なかったと推測できる。

このことが、聖マタイ3連作に於いて、《聖マタイの召命》では眼鏡を持った姿のマタイが描かれたものの、《聖マタイの殉教》・《聖マタイと天使》では、眼鏡が描かれない理由となるのだ。

従って、《聖マタイの召命》の眼鏡を持った男がマタイであっても、連作としての繋がりに於いて、【全く違和感はない】のだ。

#### 結論

つまり、俯いた収税史の若者が聖マタイとするなら、3作品の統合性が損なわれるのだ。



《聖マタイの召命》

\* 当時は、必要時のみメガネを持った。常時は顔にかけていなかった。  
眼鏡のツル首は、まだ発明されていない時代だった。

